

乱

RAN 7
麦社通信

『特集・アナキズム運動の軌跡』

—対談—

昭和期アナキズム運動の軌跡

秋山
相沢

尚

活
清
夫
普

壊滅せる地下組織の企図

—蓮台

寺

アナキズム運動抄史（二）

—相沢

尚

“五月”以後のバリ寸感

—江口

幹



思想の科学

十一月号
二二〇円

特集 アナキズムの可能性

反国家としての革命

大沢正道

アナルコ・サンジカリズムの可能性

木下半治

暴力論ノート

向井孝

性と自由について

秋山清

運動としてのアナキズム

蓮台寺晋

アナキズムに要求されるもの

藤川健郎

思想・地理・人理

富士正晴

某る在日朝鮮無政府主義者の回想

宋世何

アナキズム文献編年史

奥沢邦成

〈連載〉朝鮮遺跡の旅 23

金達寿

権力の拒絶

●アナキズムの哲学

秋山清編集・解説

権力の頑な拒絶をもって現代を撃つラディカルなメッセージ／アナキズム哲学の地歩を築いたブルードン、バクーニン、クロポトキンをはじめ、非妥協的行動者マラテスタ、芸術を通して個体内からの解放を説くリード、ニューヨークに生まれ育った反アメリカ思想の旗手グッドマンらの思想的核心たる論文と秋山清の書下し百枚を集録、民衆の情念の奥深く複雑な屈曲を見せつつ息づく反権力の思想／アナキズムの今日的意味を問う！

価九五〇円

風媒社

名古屋市中区不二見町7-1

思想の科学社 東京都千代田区飯

田橋4-9-9 TEL 263-0821

— 対 談 —

昭和期アナキズム運動の軌跡

— 小松論文をめぐって —

相 沢 尚 夫
秋 山 清

司会 『現代と思想』三号の小松隆二氏の論文は、昭和期、それも大戦前のアナキズム運動に関する、いわゆるアナキストではない側からの論文として、今までになくまとめ上げていると思われますし、さまざま否定面をはっきりと指摘しているわけです。ただ、具体的事実経過等に関しては少々疑問の個所もありますが、それはともかく、それらの背景を背負いながらも、現在運動を押し進めていこうとするわれわれにも相当に参考になると考えるわけです。そこで、当時、直接運動に身を置いていた秋山、相沢さんに、先ず小松論文に対する補足というか反論というものから、対談を進めていきたいと思えます。それから、集まった人達も、質問なり意見なりは積極的にならうぞ。

小松論文を読んで

相沢 小松さんのこれは、従来言われていたアナキズム、そういう言い方はおかしいかも知れないけれども、その総括的なものとしては非常にまとめていると思います。ただ、昭和十二年ぐらいの運動ですから、小松さんのような外から研究するという立場の人はそれでいいと思いますが、運動するという立場の人は、戦後の運動との関連で、どう総括するかということが一つの問題だろうと思います。

ざっくりばらんに申しますと、戦後の運動は、戦前の運動と同じ形をもって出発し

たんじゃないか。それが今だに尾をひいている面の運動もあるということが一つ。それはここで小松さんが詳しく書いておられるのと同じようなことを、この現在でもやるうとしている人達があるように見うけられるということ。で、それは何故克服されないのかという問題が一つ。戦前にやっていたわれわれとしては、現在の情勢が非常に違っていると思っている。ですから、戦前の運動で、戦後に残すべきものはどういふものであるか、修正すべきものはどういふものであるかということを、現代は検討する必要があるんじゃないか。

えーこれは皆さん方にいろいろ批判されるかも知れませんが、戦争に敗けたということ以後の状況は、下からの革命ではなかったにせよ、私に言わせると、第二回目のブルジョア革命だったと思うわけです。第一次のブルジョア革命が明治維新だとすれば、第二ブルジョア革命というのが、戦後の歴史だったんじゃないか。そういう状況の中でアナキズムがどう動いていくか。

アナキズムが復活したとかなんとかジャーナリズムが言いますが、昔からの続いて来たアナキストの力で復活させたんじゃないかと、情勢が復活させるようなものを生んだんだということから出発しないと、戦後の運動というのはなかなか困難になるんじゃないか、と思います。この論文の批判という点ではなしにです。

大雑把に言いますと、純正アナキズムとアナルコ・サンジカリズムは一つのものに一諸になったけれども、そこで止まったというのが戦前のアナキズム運動だったんじゃないか。戦後はそこから出発して、忌憚なく言うと、最初は、ひどい抑圧、弾圧を受けていてニッチもサッチもいかなかった人がようやくなんとか喋られるようになった。それだから、昔やったのをなんとかやろうじゃないかというだけで集まって来たので、私の言う第二次ブルジョア革命を分析するということに欠けるものがある。この点を小松さんは指摘してまずけれども、これは確かだと思えます。

秋山 君の話しを聞いているといろんなことを思い出してね。いろいろと話でできそうな気がするんだけど。いま相沢君が力を入れて言ったところで、昭和十二年かな、純正アナキズムとアナルコ・サンジカリズムが対立し、分裂していくというのは、情勢がアナキズムにとって傾いて悪くなっていく過程のなかで対立が激しくなる。まったく仇敵のように憎みあうような状態になった。これは運動が落ちていくところでそうなったと思う。直接それを目的として無政府共産党が創られたと

は思わないけれども、無政府共産党が結成されて活動していくその動きがそれを統合するというか一つにする気運を作ったと見てるんだだけだね。つまり、どんなことでも動きがなくて、観念では理論だけでは統合だとか分裂だとかいうことは、実は起らないんだと、最近僕はこれなど読みながら考えたことですけどね。一つの運動があった為に、具体的に統合が行われたということは、非常に僕にとっては、大事な教訓に今だになつてゐる。

転向問題とアナキズム

秋山 小松さんのこの論文の中の「ただ、このような個の視点は、アナキズムのすぐれた特色ではあつても、それが実践に移された場合、必ずしも長所とのみなつていたのではない。むしろ共産主義の場合、党や主義をよりどころに、弾圧下にも思想を守りとおしたものが少なくなつたのに、個以外歯止めがないアナキストの場合、弾圧下に安易に個への逃避や埋没をはかつたり、さらには転向するものさえ少なくなつた。一見強靱にみえる個の視点も、このようにいったん守勢にたつと、しばしば脆弱なものとなつて、対立や衰退や転向に拍車をかける役割も果たすことになつたわけである」ということに、小松さんのアナキズム運動に対する評価の立場がよく出ていると思うんですよ。私共から見ると、広義なマルクス主義的観点で、あちらこちらの批判の言葉がはさまれていると思うのです。

無政府共産党事件以後、私がつ持っている記録では、東京にはもつといたかもしれないけれど、四百人ぐらい名前があがつていますが、検挙されたものは。ちやうど、シナ事変の始まる時で、満州事変があつて情勢がガラリと変わつてゐる時ですから、あの事件にからむ全国的な大検挙で、まずアナキズムの活動は押えられてしまつた。そういう時に、あとよりどころは何かというところ、やはり最後はアナキズムの特徴である個の思想といひますか、自分を主軸にしてものを考えるという、そういうよりどころが、わずかのアナキストの戦争中のくぐり方の支えになつたんじゃないか。小松さんの言つてゐるのは、組織が壊滅したらもうダメになつたということなんですけれど、その点では、組織が壊滅したことは事実なんで如何ともしがたいんですが、組織が壊滅しても、お互いの連絡等は皆無なものではなくて、石川さんや近藤さんなどを中心にしての一部の人達の会合などは、つまり時局に関しての批判と

しての会合などは、内密にもたれていたわけです。それは、人的なつながりはあつたけれど、もう少し掘り下げれば、個々の自覚以外にその頃その人達を集めるものは何もなかった。アナキズムが自分の中にあることの存在は続けられたという、私はそういう考え方をするので、小松さんのようにこう批判してしまつては、アナキズムの、僕達の考える批判の根拠は逆のような気がする。そういう危惧を僕は持つた。最初に相沢君が言つたように、戦前のアナキズムの運動を総括的に批判的にまとめ上げたことは今までにない仕事だと思ふけれども、何か批判の立場はアナキズム的ではないという意見を一つ僕は持っている。

最後になると、組織がなくてもアナキストはありうるし、なきやいかんと思うんです。何かそこへいくと、アナルコ・サンジカリズムを支えるものも、純正無政府主義を支えるものも、やっぱり個人の思想というか個人の存在というか、そういうものまで還元してなお、存在しうるものがアナキズムじゃなかるるか、そこを僕は重要視したい。戦争中の事についても、それが非常に弱かつた人は、戦後のアナキズムの活動に殆んど何も出来なかつたんじゃないかということ、そういう意見をここで一つ述べたいと思います。

相沢 鈴木靖之がね、あれは何時だつたかなア……。佐野、鍋山が転向声明を出した十八年頃だつたと思うが、アナキストには転向はあり得ないということに僕に言ってきたことがあるんだがね。それはやっぱり君の言うようなね、個人なんだから、個を問題にする場合、権力を否定するんだから、まあ対立しちまうんだから、俺は転向はあり得ない、ということを極力強調した。

秋山 佐野、鍋山の転向は運動との関係でね、日本の国体を認めたからそういうことで……。ああ、昔の話をしたついでに……。

僕が話しをしたいのには、戦後アナキスト連盟に集まつた連中の中から、マルクス主義に転向、これはまことに不可思議だけど、共産党に入っていく人がかなり沢山出たという事実、これが一つある。それはやはり、小松さんの批判のように、アナキズムが大正時代の労働運動の中で活動したように、戦後バツと出るように、もつと華々しくなる期待をしたけどそれがなかつたことで、何か、その日その時代に合うような活動をしたいという、単なる個人的な見栄や欲望というような悪口じゃなくて、活動している方にひかれていくというものもあつたと思う。

相沢 地方で随分、立候補したりした人が出たんだよな、地方選挙などに……

質問 前々から不思議だったんですけど、非常に具体的な形で、クロボトキンが第一次大戦で、石川さんも関係してるけれども、戦争を支持して、それでロシアでは実際の運動からクロボトキンの影響力がなくなつた非常に大きな原因になっているわけです。それまで密接に関連していたグループが、まあ尊敬はしても具体的な運動の方針としては、あまりクロボトキンの言うことをきかなくなつちやう。そういうところで大きな問題が既にあつた。日本の場合特殊かも知れないけれど、第二次大戦に入っていく段階で、岩佐なんか同じような態度をとっていくわけですね。当時クロボトキンのことなんか、全然意識においてなかつたんですか。

秋山 僕らや相沢君なんかもそうですが、あの問題は大変大事な教訓でしてね。あれは、原案はコルネリッセンか誰かが書いたやつだな、クロボトキンがそれに手を入れて発表したあの十六人問題だな。あの声明は読んでみると非常に屈折したもんだけど……簡単に言うと、暴力には暴力をもつてという考え方にもなるんだけれど、根本的にはまったく間違いだとも今でも思うし、あれについての批判は日本のアナキストもはつきり学んだはずなんですよ。現に日本に翻訳の文章が出ているんだからね、昭和の初め頃。その問題を僕達は先輩に聞かされて来たんだから……。

なんかね、岩佐老人の書いた『国家論大綱』というのは、僕のとこに写しがありますけどね、日本だけは結局特殊の国で、資本主義は大変悪いんだ、権力も悪いんだ、しかし権力を持って資本主義国家をあやつっているのは、天皇をとりまいている、古い言葉で言うと、いわゆる君側の奸であつて、天皇は悪くない。天皇と民衆というか国民、人民というものは直結すればこれが最高で、日本の天皇には初めから支配者としての歴史はないんだという、大雑把にいうとそういうことです。だから、日本の国の為に、あるいは日本民族の為に、言葉ははつきり言わないけれど、自分は従来言っていた主張を棄てるという、転向の声明書でもあるわけですね。それで岩佐老人は国際的にも有名でしたから、アナキストはこのような転向声明書を出したということで、内務省から全国の警察に刷り物が回つたんですよ。

相沢 そういうことだったんだな。いやあ裁判所がね教えてくれるんだよ。教えてくれるというのはおかしいけれど、資本主義は悪い、それは分かる、右翼の連中が言うようなことを誘導するんだな。天皇を認めてね、あとはその社会を改造するということは結構なことだと言うわけですよ。財閥支配はけしからん、搾取のなることになることはないんだと、天皇だけは違つて、こういうことはさかんに言うんだけ

ど、僕が「天皇制」云々と言うと怒るんだ。天皇制というものはと言うと、だめだ、そんな問題のたて方はだめだ、「天皇制」と言うのは良くないと、それで大部点数を悪くしたんだけど。これは岩佐の……

秋山 ウン、岩佐老人の主旨と全く同じだよ。岩佐がそれを書くためには権藤成卿の影響があるんだよ。言葉など引用して書いてあるし……。

合同の具体的契機

秋山 相沢君も、純正無政府主義とアナルコ・サンジカリズムの関係の中で大分苦勞させられた方だった。渦中にいたから。『自連』の編集をやったかな。

相沢 自連と自協との合同は、あれは満州事変の後だね。非常にファッシュョ化してきて、アナ系がこんな事では駄目だと、それで昭和八年のメーデーをね、メーデーっていうのは葬式行列だと言って非難するんだよなみんな、それで自連は、印刷工組合やなんかはメーデーには出たりしてたんだけども、ともかく東京にいる連中全員で出てやろうじゃないかということになった。その集まりをした後の会合で、自協と単に対立だけしていたって始まらないという話になった。自協の方もね、先細りのもんだから孤立しちゃっててね。

秋山 いやね、個人的な思い出話でつまらんかも知れないけどね、当時のメーデーに出るのは全部で一万足らずだね。そこに出るには労働組合を結成してその代表者、組合員でなきゃ駄目で、思想団体なんか入れない。入口に柵を作ってそこを一人づつ通して、顔の知れてる奴はそこで引っぱるんだ、警視庁で。それでまあ他者を抜けていったりするんだけどね。僕は神田日活の連中にまぎれこんで映画従業員組合を即席に創って、その代表になつて会場に入った。そうしたら、タケイというアナ系の顔をよく知ってる刑事が最後の関門の所に立っていて、ちょっと引っぱるんだよ。なんだ！ って言ったら、どうぞお通り下さい……それでまた各組合で演説をやる所まで来て、途中で引っぱるから、なんて言うんだよね。金沢というのがいたろ、あれが、俺はこういう所で話しをしたことがないから君の代わり一度やらせてくれ、と言うので、替わってやったわけだ。そして彼が立ち上って、映画従業員組合という名前を言っただけで、いきなりとび上つて来た刑事に検束されちゃった。二十九日も喰らって後でこぼしてたよ……。

どんなことでもね、具体的な活動が何かないと、話し合いだけで合同したり、前に進むということは私達の小さな経験でもないですね。今相沢君が言っているのはそういうことだけだね。

小松さんの本に書いてあるように、大杉時代に培われた労働組合に於けるサンジカリズムの勢力をガタッと最後に落したのは、この自連と自協の対立なんですよ。その対立を解消していくきっかけは、対立している中で心あるものは互いにやはりこれではいかんと思いつつながら、その時のメーデーにみんな出ようじゃないかと相談をした、その動きの中で解消していく。

相沢 その後でね、関東労働組合会議という、高野なんかのいわゆる合法派の連中なんかと、ナチ・ヒトラーの政権が第一党になった時かな、『反ナチス・ファッショ粉砕同盟』というのを創った。その時に自連も加盟したし自協も加盟した。ところが高野派や合法左翼の連中は非常に多いもんですからね、代表権はむこうへとられてしまった。事務局には岩佐さんか誰かが潜りこんだけど、ただそれだけでは仕方がないんで、こちらはアナキストだけで協議して方針を決めて運動方針の中へ持ち込もうじゃないかということで、自連と自協とで、『弾圧防衛無政府主義者委員会』を創った。実際の活動は各国へ声明書を送ったぐらいで、その運動そのものは非常に弱かったんだけど、そこで自協と自連とで一緒に仕事を始めたわけです。それからです、争議の応援を互いにやり始めたのは。その頃、自協の『戦線確立研究会』というのを山口健介、田所などが中心で始めて、自連へも趣意書などを送って来たりして、段々意見が互いに解って来た。そういう背景があって合同したわけですよ。

秋山 合同と言えば、文化運動の関係で『解放文化連盟』というのが一番先に両方のものを一緒にして出来た団体なんですよ。活動は昭和八年から始めたから、その一年程前からその準備機関として研究会などをかなり積極的にやった。他の団体にも今までのような小さな対立は止めた方がいいだろうという意見をどんどん出した。事実そういう動きがあるところだから、小さな部分からでも、実践していくとそれがものになるということ……。その過程で無政府共産党が出来たのか、無政府共産党を創る過程で合同への動きが生まれたか、どっちが裏か表か分らんが。

相沢 その過程で無政府共産党が出来た。回想にはまあ裏の裏の話になっちゃうんで書かなかったんだけど、僕は、人が悪いようだけど二見の行動力は魅力だった

んで、彼もまたね、俺が金を作つてやる、それで君は運動しろ、何をやっても俺は口を出さない、とね。実行力があるから多少金を作ってくれるだろう、どっから強盗してでもと思ったわけなんだ。

秋山 強盗が案外へただったね。

相沢 ああへただった。

戦後の運動の出発と現在の課題

質問 戦争の中で力関係として敗けていくのは仕方がないとしても、それが戦後全然生かされないで具体的に何をやるかというところを離れて、何となく集まつてしまったというところがかなり重要な問題点ではないかと思うんですが。

秋山 まあ最初集まった時はね、よく生き延びて集まったという感じが先でね。大体みんなそういう気運だったよね、初めは……

相沢 それからね、恐らく気がつかなかっただろうと思うけど、労働者には違いないんですけど、みんな敗戦で氣力弱めちゃっていたと思うんです。印刷工の諸君は読売争議で全部誠になっちゃったし、僕は大阪にいたけれど、大阪でもほとんど全部仕事をもっていない、ヤミ屋だったんです。元は労働者で徴用工で何処かへ行ってたのかも知れないし、とにかくあの九月一日付で日本の会社はほとんど全部が解散したんですから、その時ほとんど全部誠になったんだらうと思うんです。その基礎がアナキストの中には無かったんじゃないかな。

秋山 ウン。工場にはね。

相沢 労働組合はほとんど出来たんですが、その中に入っている人達がまずいなかったんだ。

秋山 多少あっちこちに入っている人はいるんだけど、組合というのが革命運動と裏表になっているような経験者はかりで、戦後のいわゆる明かるい所で議決をして代表者を募つて、それで運営してゆくという経験がまるで無かつたんですね。

相沢 僕も無かつたんだけれどね。組合を作つたわけなんだ。共産党系にも総同盟系にも産別にもとにかく入らない、政党の支配介入反対というスローガンを最初に掲げた組合を作つたんですけれども、これは如何にもサンジカリズムにも見えるんだけれども、そうではないんだね。極めて右翼的な分子が非常に強く入っている

んだね。というのは、自分の企業だけよけりゃいいんだと、共産党が来てあれこれ政治運動なんかやらされちゃアかなわねんだという意識の方が三分の二以上ですね。それから総同盟は総同盟、産別は産別ということで、共産党にとか社会党に方針を押しつけられるんで、そういうのは反対だと、そういう意見が極少数ある。片方は日常の要求さえ通ればそれでいいんだと、それには企業の範囲内ですればいいんだという、極めて改良主義的な意見、今の中立労連はそれだと思っっていますね、企業別組合らしい組合だと思っすけれども、そういうのが入っている。それで大阪でアナキストは全部入って言ったんですよ。ところが入って来ないんだなア、入って来るのは二、三人で……。

政党支持あるいは支持しないのは、これは自由だと、そういう立場をとった以上アナルコ・サンジカリズムと言えないんですよ。言ってしまうとこれ一つに限定される、それじゃ共産党だっていい社会党だっていい、そういう風に限定するのはしからんではないかと、いろんな話が沢山出てくる。それで結局、極めて微温的な組合になったんです。だから中へどんどん入れと言っただけでも、その正面に掲げたスローガンがアナルコ・サンジカリズムでないと入りにくいんだなみんな。どうして入らない、アナルコ・サンジカリズムを宣伝したってこの組合では誰も文句を言わないんだ、共産党もどんどん細胞を作っていましたからね、そんな作っても構わない作りたければ作れ、ということをやったわけです。ただ組合として共産党は支持しない社会党も支持しないし何も支持しない、組合支部だけ認めるという立場に立って、そういう意見を言う、ほとんど全部が支持したので、その関係上アナルコ・サンジカリズムと言えなくなっちゃったんだ。

秋山　それがアナルコ・サンジカリズムじゃないか。そう言えばよかったのに。さっきの質問に幾らか答えることになると思うけど、アナキスト連盟を創った時に、アナキストと称する掠屋ね、会社を回って広告をもらい金を取る連中が昔から沢山いるわけですよ、アナキズムの周辺に。そういう連中が、苦勞して平民新聞というのを出しているんだからこれを持っていろんな会社を回って広告料を取って来る、それをやらせろというわけだ。それをやるともう社会的な信用が無くなるわけだが、平民新聞をそれに利用させると随分ウルさかった。これを近藤さんは頑として断わった。これがせつかくままとまって来た戦後のアナキストの団体が分裂したことの一つの理由なんです。

最初に結成されたアナキスト連盟が大変な大水増のもので、本当に運動する人達で出発をすれば、形は変わったものになっていたのではなからうかと、そういう反省があるんです。しかし、あの時点で、誰も彼もよく生き残ったと、戦争中は明治神宮なんか参っていた連中でも、アナキスト連盟の総会に来て申し込むと断わるわけにはいかんというような形で、これはもう初めから運動の団体にならなかつた。ならないと見込みをつけて逃げたようなところが僕自身にはあるけど。そういう分裂なんかしているんな迂余曲折があつて、まア僕自身言へば暫く隠居してたんだけど、暫くして呼びに来たんだ。そうしたらもういろんな面倒臭い事を引き受けることになつて……

相沢 小松さんの書いている、労働組合という労働者とのつながりが無くなったという問題、これは重要な問題だと思う。

あの当時、失業者の集まりだから、労働組合には違いないけれどもつながりがなくなつちやつてる。で、個人的に仲が良かった者を引っぱつて来る。そういうこと以外出来なかつた時代だったわけですが、現在それが非常に尾をひいて、やはり労働者とのつながりという基盤が失なわれていることが、アナキズムは現在各方面から注目を浴びているけれども、アナキストとしての運動としてはあまり力がないことの一つの原因になっているんじゃないか。ですから、どういう風にして労働組合、労働者とのつながりを回復するか。現在は客観情勢はアナキズムのつながりが強くなつてしかるべき時代ではないか、と思うんだけど……

秋山 労働者自体の質が、大正時代と昭和の初めと變つて来たような気がしません。

相沢 ええ。

秋山 それから、労働組合が資本主義組織を支える足にされてしまつて、革命の足となる傾向ははるかに遠去かつてしまつている。その中で、アナルコ・サンジカリズムの組合運動などというのは、大変骨の折れる仕事で、暫くは絶望的に見られないような気がして……

現在は労働階級そのものの変化ということがあると思うんです。そこで、昔のように、労働者をアナルコ・サンジカリズム的に組織することが可能かどうか。でないなら別の観点で労働者の中へ入るのがみつかるかどうか。そういう問題が出て来ると思ふんです。だから昔のことを考えて、すぐ労働者の中に入って行けとか、ア

ナルコ・サンジカリズムが入らないから駄目じゃないかということ、現実としてそれを納得して、もう一度巻き返しをするにしても、その相手の正体はすっかり変わってしまった。昔は労働者ということでかなり社会主義的な立場に近づいたものが質的にあつたが、今は労働者あるいは工場で働いている人は、生活が出来るのか、させられているのかは分らんけれど、非常にしばられている。そういう状況にある。つまりね、バクーニンが非常に単純に言っている、破壊してしまえという、そういう感情に近づくものが出て来たような気がしている。

——(注) 以下、現在の運動の課題を中心に、参加した人々を加えて一時間あまり討論が続けられたが、紙上での再録は紙面の都合で、表題に関連するものに応限定したことをお断りする。

—— 編集部

麦社 連続講座 (第二回)

現代社会とアナキズム

10・23 (土) 江口 幹

10・24 (日) 片岡啓治

10・26 (火) 秋山 清

蓮台寺晋

整理券／五百円 (三日間通し) 各夜六時より (詳細は麦社九八七・五七六五まで)

大阪地区麦社連続講座／時・11月8日夜六時より／場所・中之島中央公会堂小会議

室／講師・江口幹、他 (予定)

地下組織との出会い

運動史の欠落部分——無政府共産党

蓮台寺 晋

盲点というものがある。広い視界ぜんたいからすればごく僅かな、文字どおり点に等しい部分で、多くの場合、どうということはない。しかし、稀なことであろうが、その一点を擬視するとき、他の世界のいっさいの意味が変らないとも限らないのである。最近、日本アナキズム運動史をあらためて見直してみても、無政府共産党こそまさにそのような欠落部分ではなかったか、という気がしてきている。

無政府共産党は、一九三五年末の徹底的弾圧によって潰滅した地下組織である。活動開始から、僅か一年余りの命であった。

従来、無政府共産党に関しては、運動史における評価や位置づけが十分になされていないばかりか、一般にはその内容もほとんど知られていなかった。植村諦「黒旗は破れた！」（『自由連合』）や秋山清「無政府共産党事件」（『思想の科学』）などを除けば、戦前衰退期のアナキズム運動の終幕を飾るセンセーショナル事件としてむしろ苛だたしげに語られるぐらいのものであった。後述するように、ほとんど注目されなかったこと自体大きな問題をはらんでいるのだが、実際に資料が乏しく実態がよく分らなかったことも事実である。しかし、昨年、理論的指導者であった相沢尚夫氏の回想（『日本無政府共産党—わが回想—』『構造』）が公にされ、党の理論的実践的全体像がほぼ明らかになったといえる。すでにそれを踏まえて無政府共産党を運動史のなかに位置づけるすぐれた論文（小松隆二「日本におけるアナキズム運動の終焉」『現代と思想』）も発表されている。

しかし、小松論文は従来への運動史の欠落を埋める画期的労作であるが、無政府共産党に関しては、なお多くの問題点を残しているように思われる。例えば、「目的と手段の一致や全体と個の問題のように、従来のアナキズムがたえず依拠しようとした原則さえ、最後は無視することになった点では、この党は、ある時点以降はむしろ従来よりいっそう観念的であったとさえいえる。現状分析も理論活動も十分行

なわず、ただ意欲や焦慮の念のみに駆られて踏みこんだ当然の到達点であったといえるだろう」というが、果してそうだったのか。私にはいささか疑問である。運動が方針提起↓実践↓総括+現状分析↓……というサイクルの繰返しによって展開されるとすれば、現状分析や理論活動をいままじし検討する必要があるのでないだろうか。「……労働運動の必要を認めながら、実際には労働組合を無視し、のみならずアナキズムとも無関係な事件をつぎつぎと起こしてしまったこと、それによって当初の意図が一般からもアナキストからも省みられぬまま、アナキズム運動全体が労働者、大衆との結びつきをまったく断たれた状態で終熄するにいたったこと——そこに戦前アナキズム運動の最後の悲劇をよみとることができるとしても、当初の意図を省みないことがむしろ問題であり、評価はそれなしには不十分なものとならざるをえないのではないか。とはいえ、党の意図ないし現状分析、理論活動といったものを詳細に検討するためには、当時の文書の多くが現存しないために資料上の制約があり、この小論も若干の問題提起にとどめざるをえないことを断らねばならない。

さて、無政府共産党の理論は、党組織に関するものと戦略戦術に関するものに、ひとまず大別することができよう。

自連・自協・黒連等の不毛な運動の総括を背景として提出された党理論は、ロシア革命の歴史的総括から過渡期を再検討し、プロレタリア独裁国家を建設しようとする企図を武力的に潰滅させるための一切の手段をとるために、強固な中央集権組織に自らを結集し、これに勝利するためには「資本主義打倒のための闘争において、国家主義的企図を圧倒するために、凡ゆる大衆運動のなかに党組織を確立し、大衆運動をセネストや暴動などの革命的闘争へ盛り上げるために、計画的に活動しなければならぬ」（『回想』）というのが、その骨子であったという。この党ないし過渡期に関する理論は、第一号パンフ（いわゆる「最高の理想社会としての無政府」）および第二号パンフにおいて主要に展開されたものであるが、いずれもいままのところ直接に検討することができないので、決定的な評価はさし控えざるをえない。しかしながら、レーニン『国家と革命』およびロシア革命の総括を媒介として、過渡期論に真向から立向ったことは注目してよい。ここで私は、クロンシュタット叛乱・マフノ運動に着目していた大杉栄が、強制送還から非業の死に至る短い期間に「Aの連盟」の創設を画策していたことを想起した。無政府共産党は、どち

らかといえは自連系の人びとを中心としており、大杉との直接的関連はほとんどないと思われるが、むしろそれ故に、この場合は興味深いものがある。党を中央集権としたことや生産力主義的傾向が強いことなど、全体にレーニン主義の影響が濃厚で、批判すべき点も少なくないと思われるが、教条主義的にアナキズムからの逸脱と非難するのではなく、先人の苦闘の跡として詳細な検討を必要としよう。私自身もそれを今後の課題とすることを約束して、先に進むことにする。

次に無政府共産党の戦略・戦術であるが、これに関しては、手許に発禁となった同党発行の『プロレタリアの戦略戦術』のリプリントがあるので、紹介をかねながら、コメントを加えよう。

「吾々の戦線に於ける一般的戦略、戦術の確立が、特に緊迫した今日の社会状況の中にあつて如何に必要であるかは今更説くまでもない。此の種の理論が今迄殆んど発表されなかつた事は、吾々の運動の全面的進出を遅らせた大きな原因の一つであらう。」(まへがき)

仮名遣いさえ直せば、今日もそのまま通用する言葉である。しかも、これは一般的批判にとどまらず、次の構成のもとに、具体的に展開されているのである。

- 一、世界帝国主義 二、日本帝国主義及び来るべき××の展望 三、最近の諸運動 四、全国自連批判 五、闘り農民批判 六、水平社運動 七、文化運動批判 八、戦争問題 九、民族問題 十、スローガン

この構成の注目すべき特徴は、全頁数の半分以上を一、二に割き、イデオロギイの啓蒙を一切省略して、政治経済分析に当てていることである。一の世界帝国主義の分析は、今日の我々にも十分に説得的な内容を有し、ほぼ次のように要約されている。

「日本帝国主義が満州に於いて開始した戦争以来、第二次世界×××××(帝国主義戦争)は既に始まろうとしている。戦争に依つて起された恐慌を克服せんとしたブルジョアジーはそのために再び戦争に直面させられたのである。このことは恐慌からの血路は、ただ必然的に起る××(戦争)を内××(乱)にまで転化することに依つてのみ見出されることを示している。

続いてこの日本帝国主義及び来るべき××の展望では、日帝を世界状況のなかに位置づけ、帝国主義戦争ならびにファッショ的反動時代の開始を察知し、「戦争に対する闘争及びファッシュイズム粉碎のための闘争」を自らの重大な任務と規定してい

る。そして、「支那国民の頑強な、執拗な抵抗」と「日本の大衆の窮乏化は日本帝國主義の全軍事計画の失敗のための基礎を示している」とし、さらに、このような条件の下に於ける任務の遂行のためには、「国内に於ける諸階級の力関係及び日本資本主義の動向、来るべき××の展望に関する正しき理解」が必要だととして、日本の支配体制を分析している。

分析は、その主要な特質を、絶対主義的支配、土地所有形態——農村における半封建的支配、独占資本主義、の三点に見出している。ここでは絶対主義的支配の分析から引用しておく。

絶対主義的支配は「稀に見る無制限な×××を掌握して、動労階級に対する抑圧と専制支配のための官僚機関を握っている。人民支配の××（強化）のために最近に至っては、その上から与えられた似而非立憲的形態の粉飾を著しく落して表面に押し出して来た。……そして国内の政治的反動、家父長的家族制度、特殊部落等の封建制残存物は絶××××（対主義制）によって為されている。

日本の絶××××は一面に於いて大土地所有者としての地主であり、一面に於いて国家資本の私有者としてのブルジョアジーである。それが帝國主義ブルジョアジーと政治的に妥協し、その政治的支配の表現として存在して来たのは、かかる階級的性質に依るのである。……

日本に於けるファッシズム、帝國主義戦争は、官僚と帝國主義ブルジョアジーとに依って行なわれるところの資本主義の恐慌からの活路として採用されている。ファッシズムはその根拠を絶××××に見出している。絶××××を表面に押し出し、美化し増大する反動の重圧と戦争の危機に対する反対を瞞着し、官僚に対する消滅しつつある幻想の維持にとめることをファッシズムは主要なる任務としているのである。」

ここから、来るべき革命における課題を、「一、封建的残存支配の撤廃 二、大土地所有の廃止 三、労働者農民による生産管理」をあげ「吾々の集中的な煽動スローガンは、帝國主義戦争に反対し、封建的残存官僚支配を××（打倒）し、米と土地と自由のための、労働者農民の社会統制のための労働者農民及び人民一般の××（革命）でなければならぬ」と主張する。その革命の中心勢力は、同一水準に立って結合した労働者・貧農・中農である。

以上のような現状分析は、概括的ではあるが、客観性を有し、「絶対主義的支

配」—天皇制の分析にみられるような相対的独自性さえ示す高度なものである。パンフの著者が、「いまや吾々の戦略・戦術の確立の第一歩を踏み出した」と自負するだけのことはあろう。

三以下では、主体状況の検討に移り、社民および日共の批判の後、「前衛組織さえ作られていない」アナキスト陣営を自己批判している。そして、八の戦争問題では、「帝国主義戦争に対する態度は常に自×の敗北主義でなければならぬ」と断言し、「防護団」の人民一般の武装への転化を主張している。また、九においては、革命的民族自決主義の主張および植民地の民族主義運動への全き支持が表明されていることを付言しておこう。

以上の概観によっても、無政府共産党の理論水準が、従来のアナキスト陣営の抽象的革命論を数段抜き出した画期的な地平に到達していたことが容易に推定できよう。いや、戦後もはたしてこの水準を突破したことがあったろうか。発禁となった『プロレタリアの戦略戦術』が、アナキストの間にどれだけ浸透していたのか、私は知らない。しかし、恐らく、ほとんどゼロに等しかつたのではないだろうかと思像する。なぜなら、浸透していたとすれば、たとえ敗北したとしても、かくも不様な状況に陥ることはなかったであらう。少くともこのパンフは、迫り来る帝国主義戦争とファッショ化嵐に対し、原則的に正当な路線を提起し、実践的に一步を踏み出そうとしていたのだから。

本来なら、ここで無政府共産党の実践活動を検討すべきところであるが、もはや紙幅がない。ただ彼らの実践は準備段階で挫折したものであり、今日の赤軍派に比較しても行動面での拙劣さは否定しえないのであるが、にもかかわらず、戦後の運動が実践的にも彼らを超えていないことを指摘するにとどめよう。

ところで、アナキズム運動史において、無政府共産党が忘れ去られていたのはなぜだろうか。

もちろん、単に史料的な問題ではない。運動史研究が過去を対象とし、一義的にその対象たる過去の運動の史的展開に規定されることはいうまでもないが、同時に、研究者の主體的立場によって大きく規定されるのである。大ざっぱにいえば、運動の現在の発展段階に規定されるのだ。

もはや多言は要すまい。敗北し挫折した者は多くを語らなかつた。私たちの運動は、戦後二五年にしてようやく、潰滅した地下組織に出会ったのである。

アナ連インター第二回大会終る

アナキスト連盟インターナショナル第二回大会は、八月一日、パリ某所に極秘裡に召集され、四日まで、四日間にわたって開催された。ハンガリー代表団はフランス国境で入国を拒否され、ニュージーランド代表団はイタリアで事故を起し、大会は、二二カ国の代表五四名、オブザーバー一六〇名によって構成された。日本からは、CSL代表本多啓司氏が参加した。

大会は、冒頭からキューバ代表団の資格をめぐって紛糾、同日夕刻には、正常な大会運営を要求するスコットランド、ドイツ、デンマーク、ノルウエー、アメリカ、日本の六カ国代表団が退場するなど、初日から波乱含みで始まり、メキシコ、日本、ポルトガル、コスタリカ、スペイン、イタリア、ドイツ、フランス、デンマーク、スコットランド、ウルガイ、ノルウエー、ヴェトナム、カナダの各代表による各国の情勢報告が行なわれたほかは、キューバ代表団問題、民族解放闘争への国際的連帯をめぐる無益な討論で時間を空費し、大会の中心議題である現代世界におけるアナキスト革命戦略の設定に関する討論は、明年イタリアで開かれる第三回大会に持ち越された。

したがって、表面的にはきわめて無意味なものに終わったと見られるが、反面、大会はアナキズム運動が世界的に新たに再生しつつある現実を如実に反映していた。すなわち、イタリアをのぞくいわゆる先進国の代表団（ノルウエー、ドイツ、オランダ、デンマーク、アメリカ、スコットランド、カナダ、フランス、日本）は、いずれもここ数年の現実の闘争の中で形成された組織の、二十代、三十代から構成される代表団を送り、開催国であるフランスが中立的な立場をとったほかは、上記八カ国代表団は（新しい革命的インターの結成を検討し合うなど）ほぼ共同歩調をとって、旧世代の代表団を送ったラテン系諸国代表団と明確な対立を見せた。それは新旧世代の対立ともいえるが、むしろアナキズムの原則の維持を第一義とする改良主義的グループと、より实际的で、非教条的な、現実の革命問題にしようとするグループとの対立と見なされるものであって、参加国のほぼ半数を占めた新世代代表団の存在は、アナキストインターが、単なる国際的アナキスト親善クラブから、共同闘争を組みうるインターナショナルへと、ごく近い将来に変質しうることを予告するものであった。

アナキズム運動抄史(二)

農村青年社事件

相沢尚夫

けれども墮落がはじまると、多くのアナキストは再び緊張を取りもどしていた。アナキズムと墮落とは何の関係もないからである。一揆暴動を革命達成の唯一の実行方法と信じて、これを真剣に追求し、実行に移そうと企図した一団の人々の活動がはじまったのであった。これが『農村青年社』のグループであった。一九三一年の頃と私は考えている。

一九二八年の秋の終り頃だったように記憶している。星野準二が私を訪ねて来た。星野は鈴木で紹介で会ったことがあったが、未だそれほど親しい仲ではなかった。彼は無口な、もの静かな男だった。

彼は文芸雑誌を出そうと思っていると話した。鈴木や入江一郎や正木久雄らが加わっているので、織田君と君にも加わってもらいたいというのが彼の用件であった。この時から私は星野と一緒に仕事をはじめた。

『黒色文芸』は二号まで続いた。二号が出た直後に、星野がまた訪ねて来た。この時、私は彼から『二十世紀』と『黒蜂』という文芸雑誌と合同しようということになっていると報告された。私は同人費を出すだけで、殆んど何もしなかったから合同の話も知らなかったのである。

こうして三誌の合同によって『黒色戦線』が生れたのである。黒色戦線社には、私たちの他に青柳優、植田、森辰之助、塩長五郎等という有力な人達が加わった。それが一年後には分裂するとは、誰も思いもしなかったのは当然である。私達は共産党系の『戦旗』に勝るとも、おとらない雑誌にしようと思気込んでいた。

アナキズム系の文芸雑誌は、いろいろあった。詳しくは秋山清君の『アナキストの文学』(表社)を読みたい。

八太舟三の『階級闘争説の誤謬』が出版されると、黒色戦線社にも問題が起っ

た。

彼はキリスト教の牧師だったが、クロボトキンに共鳴し、次第にアナキズムへの情熱を燃やして、教会を棄てて東京へ出た。そして忽ち黒色青年連盟の理論家になった。彼と前田とは手を結んだ。共産党を憎悪した前田の心情的アナキズムは、八太の理論によって強化された。八太の理論はクロボトキンのサンヂカリズムに対する批判を継承して構成された。断つておくがクロボトキンは後にサンヂカリズム批判を訂正したが、八太の理論はこの点には注意をはらってはいなかった。岩佐作太郎の有名な労働組合山賊論も、アナルコ・サンヂカリズムに対するマラテスタの批判を継承して構成されたが、八太は岩佐の理論に同意する。八太と岩佐の思想が黒色青年連盟の理論的根拠となった。

この書が黒色戦線社に問題を起したのは、批判的に問題を提起したからだった。編集同人の態度を決定するために研究会を持つことをきめた。そのために私は八太舟三に会って話を聴き機会を持つことができた。彼はその頃、堀切に住んでいた。探し歩いていると板塀に無政府共産党と大書してある家を見付けたので此処だとすぐ判った。彼が私にはないような勇氣の持主らしいと思えて興味をおぼえたのである。その日は、彼が不在だったので会えなかったが、間もなく彼が世田ヶ谷へ転居したと聞いたので其処へ出かけて行つた。私が熱心に彼に会いたいと思つたのは、彼がこの著書を書いた真意を直接聴きたかつたからであつた。私には階級闘争説の否定が理解できなかつたのである。彼の家は松陰神社の近くですぐ見付かつた。生垣にかこまれた小さな家だったから、無政府共産と大書出来る塀はなかつた。案内を乞うと、デブプリと言うか、ズングリと言うか、多少均整のとれない体付の男が出て来た。それが八太舟三であつた。彼は初対面の私たちを（伊藤道賢、平松義輝と同行した）心よく招き入れてくれた。

彼の言うには、マルクスは人間の有史以来の歴史は階級闘争の歴史だと云っているが、実際は階級支配の交替の歴史だつたと云うべきだ。封建貴族、ブルジョアジームな階級支配の交替である。そして今度はプロレタリアートが支配階級になるとマルクスは主張している。アナキストはプロレタリアートが支配階級になるために革命を主張するのではない。人類の解放のために革命を主張しているのである。真の革命を主張する立場から観るとマルクスの階級闘争説は全く誤りだということが明らかに。ところが、ブルジョアジーを倒してプロレタリアートを支配階級に

するプロレタリア独裁という名の共産党の強権支配をつくろうというマルクスの階級闘争説の真意を知らずに階級闘争だ、ブルジョアに対するプロレタリアの階級闘争が何故悪いのだと主張する人達がいるが、これはマルクスの階級闘争説を知らないのだ。階級闘争が現に行われているのに、これを否定しているのではない。労働者が賃上げや待遇改善を要求して戦うことを否定しているのではない。それは資本主義のワクから出ない闘争だ。改良主義だと云っているだけである。革命とは階級闘争ではないと主張しているのである。階級闘争ではプロレタリア独裁になると云うのである。現にロシアでは誰も解放されていないではないか。アナキスト革命は、ブルジョアジーを倒して、プロレタリアートが政権をとることではない。階級そのものをなくしてしまうのが革命だと主張しているのである。それが真の革命であり、アナキスト革命なのだ。

ざっとこんなことだったと思う。

私たちは八太説の大部分を首肯することができたが、労働運動とアナキスト革命とを断絶させる見解は認め難かった。しかし八太説を観念論だと片づけて全面に否定するアナルコ・サンデカリストの主張にも賛成できなかった。

研究会は誤解からはじまった。階級闘争とアナキスト革命との関連を深く検討したならあるいは共通点が見出されたらうに、八太説を支持するか、否かという問題提起は、全国自連統行大会に於ける綱領問題について全国自連か、地方自協か、いずれを支持するかという問題に移行せざるを得なかった。かくて互いに信ずる道を進むことになった。そして夫々「黒旗」と「黒戦」が発行されることになった。今、この事件を想起すると血気にはやった自分を思い浮べて、苦笑せざるを得ないが、当時はこれこそアナキスト革命の真の道であると信じていたのである。

「黒旗」は八太説を支持した。そしてその帰結として次第に即時武装蜂起の強調へと進んで行った。

星野が鈴木靖之等と共に、宮崎晃等のグループに接近して行った、あるいは彼等とグループをつくったのは、その頃のことであろうと推測している。彼が秘密に何事かを画策しているらしいと気付いていたからであるが、彼も話さなければ、私も尋ねはしなかった。彼は次第に「黒旗」編集の仕事から手を引いて行った。添田晋の「農民に訴う」の原稿を持って来て、これを是非、掲載してくれと云って来た時、私はそれが彼の加わっているグループの作成した文書であると感付いたのであ

る。私は未だ宣伝啓蒙運動にとどまっていた、実行方法を模索していたのでこの原稿を興味深く読んだ。

▲黒旗▼は一年半ほど続いたが、経済的に継続出来なくなった。▲黒旗▼を休刊した後のことである。一九三一年の夏のはじめだったろう。星野が訪ねて来て、「宮崎が会いたいと云っているから、よかつたら一緒に行こう」と云って来た。こうして宮崎にはじめて会った。彼が変名で住んでいた隠れ家には、彼の夫人の八木秋子と田代儀三郎がいたと記憶する。

宮崎の用件は、私に資金を都合してくれという依頼だった。私の記憶では、彼は、宣伝啓蒙の時代は過ぎた。観念的にアナキズムを宣伝しているだけでは仕方がない。実際に自由コンミュンを建設する運動を、全国的に起す時が来たと考えた。そして自由コンミュンの建設は、農民の間から、農民が立ち上らない限り不可能である。農民の困窮はもうどうにもならぬところに来ていては、その好機だと信ずる。既に各地に同志を求めて来たが、今は東京にいる我々が起ち上るのを待っている。全国一斉にという訳にはゆかないから、まずある一地方が蜂起するならば、各地の同志はこれに呼応して立つだろう。われわれは武器を手に入れて、一点で蜂起する。武器入手の資金は、ブルジョアから手に入れる計画だが、その計画を実行するための資金が必要である。その金を君に都合してもらいたいのだ。と云う話だった。

私は宮崎の主張に賛成できないものを感じていたから、このグループに加わる意志はなかった。私は都市労働者の大衆運動が高揚しない限り、農民の自由コンミュン建設運動は失敗すると考えていた。大衆運動を離れて革命運動はあり得ないし、蜂起しても失敗に終ると考えていた。アナルコ・サンジカリズムはアナキズム運動の都市労働者の運動だと考えた。アナルコ・サンヂカリズムが即、アナキズムとは考えない。こうして私はやがて無政府共産党の結成、大衆運動に基盤を持った革命団体の組織という思想に導かれて行くことになる。

ともあれ、「純正」アナキズムのなから実行に移った革命的グループは、農村青年社と無政府共産党の二つだけだったことは真実である。この両者は全く異なる運動のように見える。しかしその底の深いところでは一致するものを持っていたそれは「純正」アナキズムであった。あるいはその亡霊であったのかもしれない。

これを克服するためには、ファシズムと戦争の数年を待たねばならなかった。

五月以後のパリ寸感

江口 幹

フランス、あるいはヨーロッパの運動については、いずれきちんと整理した上で書くこととして、雑録風にパリ通信を送る。六八年五月以後、構造的にはフランスはほとんど変化していないものの、やはり大きな変化を経験しつつあるという印象を受ける。それを第一に裏付けるのは、パリ市内での異様なほどの連日にわたる警官の動員だ。夜になるとパリは正に警官に占拠されている。特にカルチュ・ラタンでは、通称「檻」と称する囚人護送車を随所に待期させていて、普通の警官だけではなく、小銃を持った警察兵とも呼ぶべき連中をまじえて、辻々を見張っている。これは六八年五月以来、連日のことだそうで、単に威嚇のためではなく、必要からそうした措置がとられているといえる。つまり爆発しかねないものが青年たちの間に充満しているわけだ。警官との衝突事件、警官の若者やジャーナリストへの暴行、逆に青年達による警官の殴打、といった事件はほとんど日常茶飯事化している。それはたとえばフランスの代表的な新聞「ル・モンド」が、政治、経済、といった欄と並んで、「騒乱」といった欄を常設していることでも知られる。そこではほとんど毎日、どこで学生が逮捕されたとか、警官の暴行を誰それが告発した、とかいった記事が見られる。また言論への抑圧（新聞の没収、責任者の処罰）も顕著で、フランス政府のファッシスト化が語られはじめていること、サルトルなどをはじめとして（ゲランも加っているが）「警察を告発する人民法廷」の準備が進められているのも、当然だという印象を受ける。

変化を感じさせる第二のものは、まず個人レベルでの革命からということだ。一種の文化革命、良風美俗に対する反抗が、生活の上で進んでいることだ。たとえば性の革命等々だが、これについては、書くとき長くなるので詳述は避ける。変化を感じさせる第三のものは、日本とは比べものにならないほどの、いわゆるゴースト

(左翼急進主義者)の量的な厚さだ。トロ系最大の組織の共産主義者同盟の動員力は万単位だといわれるし、アナ系の主要組織の一つ、ORRA(アナキスト革命組織)の動員力も千単位だという。そして、そういう層の厚さをうらづけるのは、実に夥しい機関紙誌が出ていること、しかもその代表的なものは、街の新聞売場で市販されていることだろう。たとえばORRAの機関紙「フロン・リベルテール」にしても、新聞売場で買うことができる。そして、サン・ミシユルにあるマスペロ書房の売店にゆくと、タイプのもので含めて、ほとんどあらゆるゴースト系の出版物が見られるが、それは東京でいえば銀座の近藤書店位の書店で、機関紙誌がおいである一角にはいつも沢山の青年たちが群がっていて、壮観だ。なかなか面白い、あるいは貴重なものもでてくるが、一例をあげれば「わめきたてる」というウーマン・リップの月経紙が出てくる(フランス語の綴りでは、月刊と月経は酷似しているし、月経のことを俗に月刊ともいう)。労働運動についても新しい動きがみられるが、これは目下資料を集めているので、それから論ずることにしたい。

そうした変化の中で、六八年五月以前に比べて、アナ系の文献も随分豊富になってきている。ロシア革命関係でいえば、マフノの自伝「ウクライナにおける反乱」アルシーノフの「マフノ運動史」メッツの「クロンシュタット・コミューン」「レニングの「ロシア革命におけるアナキズムとマルクス主義」などがあるし、クロンシュタット・コミューンの機関紙「クロンシュタット・イズベスチア」の複製もでている。スペイン革命関係でいえば、ガストン・ルバルの「絶対自由主義スペイン一九三六—三九」、フランク・ミンツの「革命的スペインにおける自治管理」、セザール・ロレンソ「スペインアナキストと権力」などが出ている。このうちアルシーノフ、ルバルのものは、いずれも四百頁ほどの大著で、ロシア、スペインにおける、アナキズムの運動史、実践的理論書として貴重なもので、是非とも邦訳すべきだが、訳者のことなどを考えるといつになったら可能だろうかと考えてしまう。このほかイヴァン・ブルデ「プロメテイウスの解放——自治管理の政治的理論のために——」メエステルの「ユーゴの自治管理はどこへゆく」など、自治管理についての研究書が目立って多くなっている。研究書では、ハウプトマン「ブルードン」、アンサール「マルクスとアナキズム」「アナキズムの誕生」、バンカル「ブルードン——多元論と自治管理」などがある。

アナキズム運動についていえば、フランス、イタリア、ドイツ、イギリス、いず

れでもここ数年の間に世代が一新した、といえる。たとえば、八月冒頭のパリでのアナキスト・インターナシヨナル大会でのフランス代表団は、二、三十代を中心に構成される、といわれている。日本を代表する本多啓司君とは似合いというべきだろう。

最後に蛇足を一つ。偶然というべきか、必要あってというべきか、スペインの反フランコ闘争の地下運動の中心人物と目され、ヨーロッパ各国の警察から追われている人物と、彼のバリ潜伏中に数回会う機会を得た。印象に残った言葉が一つあるので書いておく。「どの国もアナキストの政治的亡命は認めない。アルジェリアもキューバも」と彼はいった。僕は、それはアナキストであることの栄光というべきものであらう、と感じた。

(七月三日)

編集後記

三ヶ月もの空白を作ってしまったことを先ずおわびしたい。

今号は特集として、昭和に入ってからのアナキズム運動の一断面を取り上げたが、もとよりこれで充分であるはずはない。戦前・後に大別される運動の断絶を痛感するわれわれは、単に大正アナキズムを引き継ぐなどということではなしに、現実運動を創出していく過程の諸問題の克服のために、埋もれ、忘れ去られようとしている過去の運動史に、出来るだけの照明を当てていきたい。それは、つまらぬ偏見にとらわれているアナキズム内部の病巣を切開し、現実の状況の中へ雄々しく翔くための一つの契機にもなるであらう。

乱 RAN 7号

1971年7月20日発行 (月刊)

定 価	80円 (〒25円)
定期購読	6号分 500円 (〒共)
編 集	『乱』編集委員会
発 行 者	秋 山 清
発 行 所	麦 社
東京都豊島区南池袋1-15-21田中ビル207	
tel. (03)987-5765	振替東京 144722

乱

R A N

バックナンバー

1号

△アナキズム神話▽をどう超えるか——藤川健郎／アナキスト官僚性の育成!?——江口幹／「土着」ということ——秋山清／わが国における反逆の原点(1)——鳥越弘之

2号

観念としての△階級闘争▽からの袂別——西田弘和／企業別組合における職場集団——柚木峻／反権力——秋山清／わが国における反逆の原点(2)——鳥越弘之

3号

△市民▽の視角とアナキズム——高島通敏／現代技術と連合主義——D・ゲラン／我々の状況と革命の戦略／少数決——秋山清／わが国における反逆の原点(3)——鳥越弘之

4号

政治の死についての小論——島崎寛／混血の礼讃——大沢正道／文明総批判(抄)——北大闘う集団／△政治▽を超える政治闘争を——嵯峨潤

5号

「自己権力」論をめぐる断想——立原信弘／反ファシズム闘争とW・ライヒ——江川允通／労働者評議会の思想——パンネクック

6号

コミュニオンと△祭り▽——藤川健郎／大企業労働運動の思想的立脚点——柚木峻／黒色青年連盟最後の大会——相沢尚夫

1号～4号各七〇〇円、5号～八〇〇円(〒各二五円)、1～6号
揃五〇〇〇円(〒共)

全体革命への序説

一五〇円
（〒35円）

大沢正道

「アナキズムの原理と原則」「プロレタリア独裁と連合主義」の二論文を収録。研究会テキスト等に好適の入門書。

研究会等で十部以上まとめて申込みの場合、割引あり

五月革命の考察

三八〇円
（〒45円）

江口

幹 最新刊 発売中

先進文明国家への叛乱の原点は何か。管理社会と呼ばれるものの強さと弱さを、フランス五月の総括を通じて検討し、現代革命の戦略の構築を試みた好著。

私の見た

日本アナキズム運動史

増補版

近藤憲二

十月刊行 予価三〇〇円（〒45円）

大杉の片腕として活躍した著者が体験をもつて語る日本アナキズム運動史。基本資料としても高く評価される。再版にあたり、新たに秋山清氏の解説を加えた。

アナキストの文学 独裁と革命

秋山清

二四〇円
（〒45円）

ファブリ

残部僅少
二〇〇円
（〒35円）

麦 社

東京都豊島区南池袋1-15-21 田中ビル207
振替口座 東京 144722 tel (03) 987-5765